

〔論 文〕

## 『レディー・スーザン』：“propriety”への挑戦

*Lady Susan: A Challenge to “Propriety”*

入 野 賀和子

Kawako Irino

「イングランドでも名うでの浮気女」<sup>(1)</sup>として登場するレディー・スーザンは、ジェイン・オースティンの作品の女主人公としては、かなり特異な存在と言える。オースティンが一貫して追求してきた、若い女性の自己認識による成長というテーマとは対極をなすような、冷然たる態度で全ての人間を利用し、支配しようとする女性のエゴイズムを描き出した『レディー・スーザン』は、この作品が発表されるに至った経緯と同様にいささか謎めいた作品である。オースティンの没後、50年以上経って甥のJ. E. オースティン＝リーによって出版された『ジェイン・オースティンの思い出』の第二版で、初めてこの作品の存在が紹介されるが、書簡体小説という少女時代に多用した小説形式の枠組を残しながら、「恋と友情」に見られるような威勢のよいバーレスク調は姿を消し、抑制された文体のそこかしこに悪意が潜んでいる。しかもそれらの手紙を書いているのは、35歳でなお、周りの男性達をたちまちのうちに虜にしてしまうほどの美貌の未亡人で、しかも16歳の娘の母親という設定である。オースティンの想像力は、16歳の娘ではなく、母親の方に向けられているのである。オースティン自身はもちろん、彼女の家族もこの作品には何ら言及していないので、『レディー・スーザン』の創作時期をめぐっては、様々な推測がなされている。几帳面な字で清書された原稿に1805の透かし文字があることから、R. W. チャプマンは、この作品が創作され清書されたのは1805年頃だと推定しているが、B. C. サザムの考えでは、創作されたのは1793-94年頃とされる。<sup>(2)</sup> オースティンの伝記を書いたジョン・ハルペリンも、1793-94年説をとっているが、<sup>(3)</sup> リチャード・オースティン＝リーとウィリアム・オースティン＝リーは、1794年頃と推定し、<sup>(4)</sup> パーク・ホーナンは、1794-95年説をとっている。<sup>(5)</sup> 大まかに言えば1793-94年頃に書かれたとする説が有力で、すなわちオースティンが18歳から19歳ぐらいの時の作品ということになる。

19歳前後で、35歳の成熟した大人の女性の心の内を描き出そうとする早熟さには驚かされるが、レディー・スーザンの造型にあたっては、従姉妹のイライザ・ド・フェイドの影響があるのではないかとされている。<sup>(6)</sup> デイヴィッド・ノークスは、戯れの恋の中で使われるきびきびした言い回しや、魅惑し策略へと誘い込むような表現は、イライザから学んだものだと述べている。<sup>(7)</sup> しかも、オースティンが『レディー・スーザン』の執筆に取り掛かっていたとされる頃、イライザの夫はフランス革命で処刑され、彼女は33歳で未亡人になっていた。確かにオースティンは、この魅力的な従姉妹から作品へのヒントを得た可能性はあるかもしれないが、それ以上に『レディー・スーザン』の原形は、ジェイ・アーノルド・レヴィンが言うように“Merry Widow”、つまり「経験と自立を少しばかり危険なくらいに手に入れた女性」の系

譜に属するように思われる。<sup>(8)</sup> 習作時代のオースティンは、彼女が慣れ親しんだ様々なタイプの小説や劇をもとに、過度の教訓調や感傷癖を笑いとばすような作品を数多く書き上げている。従って王政復古期の喜劇に数多く登場するような、偽善的で挑発的でしかも気の利いた会話に長けた“Merry Widow”像は、18世紀後半に至っても小説や劇の中で脈々と受け継がれており、オースティンにとっても十分馴染みのある登場人物であったと思われる。それゆえレディー・スーザンの造型は、オースティンにとっては我々が考えるほどには意外なものではなかったかもしれないのである。かなり類型的な“Merry Widow”像を残しながら、それまでの彼女の作品に見られた飛び跳ねるようなバーレスク調が抑えられ、より実人生を写し出そうとする姿勢に向かいつつあるように思われる。その意味で『レディー・スーザン』は、レヴィンも述べているように、オースティンの習作時代と本格的な創作活動に入る間の時期にぽつんと存在する作品ではなく、言わば二つの時期の間の橋渡しの作品であり、習作時代の頂点をなす作品と見なされるべきものと思われる。<sup>(9)</sup>

『レディー・スーザン』は、義弟の屋敷を訪問したい旨を告げる内容の手紙から始まっている。“delightful retirement”、“fortitude”、“duty and affection”といった分別に満ちた言葉使いや、優雅な言い回しとは裏腹に、有無を言わさぬ押し付けがましさが感じられる手紙である。この時点でレディー・スーザンは、それまでの滞在先でもうすでに一つの手柄を立てている。「その家の女達は結託して、私を目の敵にしているのです」(208)、「一家全員あんなにも変わってしまったところはないでしょう。家族中が戦争状態になっています」(209)と、レディー・スーザンは友人のジョンソン夫人に書き送っている。一方、レディー・スーザンを受け入れることになるヴァーノン夫人やその弟のレジナルド・ド・カーシも、レディー・スーザンの巧みに人の心を魅了してしまう危険な才能については、すでに知人達から十分に知らされている。しかしその受け止め方には少し違いが見られる。ヴァーノン夫人は、「彼女の魅力的な才能が、実質を伴わない表面的なものだとすると、それに惑わされないように精一杯警戒するつもりです」(210)と、不安と不信感を隠さない。それに対して、レジナルドの反応は、「彼女はたいていの人ならそれで満足してしまう、まともな類の恋の戯れに飽き足らず、家族全体を惨めにするという、より甘美な喜びを求めているのです」(211)と、皮肉に満ちており、「レディー・スーザンには魅惑的な欺瞞の才能があるようで、それを実際この目で見破ってやるのは、愉快的ことに違いありません」(212)と自信満々である。レジナルドの言葉には、若いとは言えない年齢に達している、レディー・スーザンに対する当てこすりとかすかな軽蔑が込められている。このように生意気で自信家のレジナルドが、レディー・スーザンの格好の餌食になるのは当然なことである。

…彼（レジナルド）には、私の興味を引く何か、ある種の生意気さや馴れ馴れしさといったものがあり、私はそれを叩き直してやります。彼は快活で賢そうですし、彼のお姉様のご親切にも吹き込んでくれた結構な私への思いやりを凌ぐほどの、大きな尊敬の念を私に抱くように仕向けてやれば、彼は楽しい恋の戯れのお相手となることでしょう。傲慢な心を抑え付け、嫌おうと初めから決めてかかっている相手に、こちらがいかにも優れているかを思い知らせてやるのは、この上なく楽しいことです…尊大なド・カーシー族の思い上がり、目に物見せてやりますわ。(217)

レディー・スーザンの関心は常に、いかに相手を利用し、操り、支配するかということに向けられているが、彼女にとってレジナルド征服は、単に恋愛におけるパワーゲームでの勝利だけでなく、レジナルド及び彼の背後にある、秩序を重んじる家父長制社会への挑戦をも意味している。レディー・スーザンにとってド・カーシー族が象徴する社会は、彼女を抑圧し、秩序と規範の中に抑え込もうとするものである。良き妻、良き母を標榜する社会に公然と挑戦するかのように、レディー・スーザンは、その社会の規範を徹底的に利用しながら己の欲望を充足しようとする。それゆえレディー・スーザンの言動は、あくまでも外見上は社会規範に則ったものとなる。

…人は自信たっぷりの振舞を媚態と結び付けがちで、また生意気な物腰は当然なことながら、生意気な心から発せられるものと考えられるものです。少なくとも私はレディー・スーザンには、不穏当なまでの厚かましきがあるものと思っていたのです。ところが、彼女の顔つきは本当に優しく、声も物腰もこちらが虜になってしまうくらい穏やかなのです。(214)

実際にレディー・スーザンを目の当たりにしたヴァーノン夫人は、とても25歳以上には見えない、釣り合いのとれた美しさと気品に驚きの声を上げる。虚栄、気取り、軽率さの片鱗も見せず、知性と優雅な礼儀作法を武器に、落ち着いた威厳ある態度で、たちまちレジナルドを魅了してしまう。レディー・スーザンの実体が如何なるものであろうと、外見上“propriety”を遵守する限り、彼女は社会に糾弾させる余地を与えない。レジナルドは優しさと繊細な振舞を全面に押し出したレディー・スーザンの中に、家父長制社会が理想とする女性像、母親像を見出しそうとする。レディー・スーザンの虜になっていくレジナルドに不安を募らせながらも、社会規範を逸脱するような振舞を見せず、非難の口実を与えないレディー・スーザンに対して、ヴァーノン夫人は無力である。「これが欺瞞でなくて、何だと言うのでしょうか…彼女は利口で愛想がよく、会話をくつろいだものにする世智に長けています。話もうまく言葉を巧みに操ります。この才能を度々駆使して黒を白と思わせてしまうのです」(214)と、ヴァーノン夫人は苛立ちを隠せないが、レジナルドがレディー・スーザンの言うがままになっていくのを、手をこまねいて見ているだけである。

フレデリカを巡ってのレディー・スーザンとヴァーノン夫人の緊張関係も、二人の対立をさらに煽るものとなっている。スミス氏によってもたらされる、「人に好感を抱かせるような礼儀作法さえ身に付けておらず、鈍感で高慢な」(212)フレデリカ像は、実際に彼女が登場する前からド・カーシー族の軽蔑の対象となっている。スミス氏は、洗練された礼儀作法の欠如ゆえにフレデリカを愚かさで高慢そのものの娘と決めつけ、さらにド・カーシー族も疑問をはさむ余地なくその情報を受け入れる。同じく彼によってもたらされたレディー・スーザンの悪行についての情報が、レディー・スーザンの優雅な礼儀作法ゆえにその信憑性に疑念が抱かれるようになるのとは対照的に、フレデリカの内気な寡黙さがかえってその情報の信憑性を裏付けてしまうのである。「あの娘は愚かで、なんの取り柄もありません」と言い切るレディー・スーザンは、自分の娘を思い通りに結婚させるために良き母親を演じながら、巧妙な虐待を繰り返す。つまり夫の病気の看護でなおざりにされていた娘の教育にとりかかるという口実で、娘をできるだけ抑圧的な束縛された状態に置き、そこから逃れるための手段として娘自らが結婚を選ぶように仕向けようとする。表面上はあくまでも娘の意思を尊重する、愛情深い良き母親を

演じるのである。

全てを計算ずくで冷静に行動するレディー・スーザンにとっての誤算は、絶望に陥った娘のとり、いわば社会的規範を逸脱したような行動である。一度目は、すぐにも結婚させようとする母親の手紙に、恐怖のあまり私塾から逃げ出したこと、二度目はレジナルドを通して母親への影響力を行使してもらおうとしたことである。未婚の若い女性が婚約者でもない男性に密かに手紙を渡すことは、明らかに行動規範に反する行為である。しかしフレデリカは、何が最も有効かということを感じとっている。「母を説得できる可能性があるのは、あなた様以外にはございません」と、ヴァーノン夫妻ではなくレジナルドに手紙を渡すのである。どのようなことになろうと、「危険を冒してやってみなければなりません」と言っているが、フレデリカは明らかにレジナルドの介入を、危険を冒してやってみるだけの価値があるものと認識している。無邪気さの中にある、無意識の計算高さが感じ取れ、オースティンの人間に対する洞察力の深さを示しているように思われる。これを境にレディー・スーザンとフレデリカの立場が逆転していくのだが、この二人が他の人間に関与する姿勢は対照的である。誰も信じず、「男達の苦悩をかき立てては勝ち誇った喜びに浸りながら、自らの愛情は決して誰にも与えない」(263) レディー・スーザンは、華やかでありながら常に孤立している。それに対して、フレデリカの内気さの中に潜む激情は、全面的な信頼と共に自分の全存在を相手に係わらせていく。

レディー・スーザンは、家父長制社会における女性が置かれた立場の危うさを知り抜いている。オースティンは『ノーサンガー寺院』の中で、リチャードソンの書いた『ランブラー誌』の記事を引用しながら、女性が相手の男性から好意を示される前に、自分の方から愛情を示すことが、行動規範を逸脱する行為であるとされる世間一般の考え方にからかいの目を向けているが、レディー・スーザンは、家父長制社会に挑戦しながら、同時に彼女の考え方は家父長制社会の行動規範そのものによる規制を受けているのである。

…あの年頃で、あの娘以上に男性の物笑いの種になりそうな娘なんて、そういるものじゃありませんわ。感情も結構強烈なところもありますし、その感情をご丁寧にも無邪気に表に出してしまうものですから、周りのどの男性からも嘲りと軽蔑の対象になるのが関の山でしょう。飾らない無邪気さなんて、恋愛においては何の役にも立ちませんわ。(236)

レディー・スーザンは、求められもしない相手に、自ら進んで愛情を表明することの危険性を承知しており、フレデリカが傍目にも明らかなほどレジナルドに想いを寄せていくことに、怒りをあらわにする。「自分達にとってしかるべきことは何かということを忘れ、世間の評判をないがしろにするような女達には、弁解の余地など有り得ない」(231)というレディー・スーザンの行動原理は、家父長制社会の女性に対する抑圧的状况を巧妙に裏返したものであると同時に、自らの行動を社会規範の衣に包み込み、正当化するための防御の武器にもなっているのである。彼女は巧みに家父長制社会の規範を、自らの目的に合わせて利用しねじ曲げて行く。

レディー・スーザンは、誰に対しても自分の内面に立ち入らせることを許さず、周りの人間は操り、利用する対象でしかない。しかし思いのままに相手を操っているように見えるレディー・スーザンではあるが、実はその自信の下に彼女の不安と深い孤立感が隠されているのである。レディー・スーザンは、彼女の行動全てにおいて、その正当性を確認したいがために、常に満足のいく説明を求めてくるレジナルドの「ばかげたほどの生真面目さ」を、「ある種の

愛情」の現れではあると言いながらも、無条件で彼女を受け入れることは決してないレジナルドに苛立っている。それに対してマナリングは、レディー・スーザンへの盲目的な崇拜で、彼女の虚栄心を完全に満足させ、さらに心の底に隠された孤立感を忘れさせてくれる都合の良い恋人である。

…私はマナリングの優しく、気前の良いところが本当に気に入っています。私のことを心の底から賛美してくれ、私がすることは何でも正しいはずだと納得してくれているのです。そして、心の中の感情が妥当なものかどうか、常に気にしてばかりいるような、詮索好きで疑り深い妄想など幾分軽蔑気味に見ているのです。マナリングは実際レジナルドとは比べものにならないくらい素晴らしい人ですわ…お気の毒に！彼は嫉妬ですっかり取り乱してしまっています。だからと言って、それを悲しんでいるわけじゃありませんのよ。だって嫉妬ほど強力な恋の援護者はいませんもの。(231)

レディー・スーザンの「気分を引き立たせ、世間に対しても機嫌良く対処できるように、心ときめくことを言ってくれる」(221)マナリングは、彼女の支配欲を完全に満足させてくれると同時に、その手放しの崇拜により、彼女に密かにつきまとう孤立感から束の間、目を逸らすことを可能にしてくれる存在なのである。レディー・スーザンは、「私に自慢するものがあるとするれば、それは雄弁の才能です。賞賛が美に仕えるように、言葉を巧みに操る才能には、尊敬と敬意が当然のことのようにつき従うものです」(230)と、能弁の才を駆使して周りの人間を操っていくが、その彼女自身も言葉の魔力の罠に落ち込んでいて、言葉巧みに彼女の虚栄心を満足させてくれる存在を求めているのである。

レディー・スーザンにとって、娘のフレデリカでさえも支配する対象でしかないが、彼女の娘に対する態度は、奇妙な逆説に満ちている。レディー・スーザンは、娘をできるだけ抑圧的な境遇に置いておくために私塾に入れるが、彼女流の弁明では、なおざりにされてきた娘の教育を少しでも補うための、娘に対する本物の愛情から出た行動であり、母親らしい優しさに欠けるように見えるのは、世の大抵の母親がそうであるように、盲目的で愚かな偏愛ぶりを示さないからだということになる。フレデリカがサー・ジェームズとの結婚にあくまでも抵抗する姿勢を見せると、レディー・スーザンは反抗への罰として、何が何でもサー・ジェームズと結婚させようとする。レディー・スーザンは、まさに家父長制社会の抑圧する父親のパロディーのような様相を帯びてくる。しかしレディー・スーザンは、子としての従順を求める、抑圧的な母親であると同時に、娘に対して女性としての魅力を競い合う同性の競争者でもある。レジナルドに想いを寄せるフレデリカに対するレディー・スーザンの態度には、母親ではなく恋の競争相手としての嫉妬と悪意が混ざり合っている。

…私は、サー・ジェームズとの縁組みを断固すすめることにするつもりです。娘がレジナルドへの想いをますます募らせていますし、そんなにも慕われていることを知って、結局は彼の方も愛情を抱き始めるかもしれませんもの。同情から生まれる好意なんて、私の目には二人とも軽蔑の対象としか映りませんが、実際にそういうことが起こってしまうことだって有り得ますもの。レジナルドが私にほんのちょっとでも冷淡になったというわけはありません。でも、このごろ彼はフレデリカのことを必要もないのに、自分の方から話

題にするようになってきました。しかも一度などあの娘の容姿を誉めるようなことを口にしたのですよ。(241)

レディー・スーザンは、ド・カーシー族への挑戦であるかのようにレジナルドを操り、またフレデリカに対しては身のほど知らずにも、恋のライバルになろうとした思い上がりを罰するかのように、レディー・スーザン自身「情け無いくらい愚かな」男と呼ぶ、サー・ジェームズと結婚させようとする。レディー・スーザンは、フレデリカの無邪気で自然な愛情表現を子供じみた、愚かな行為と軽蔑するが、そのようなレディー・スーザンの自信に満ちた態度の背後には、フレデリカの持つ無邪気さへの嫉妬と苛立ちが潜んでいるのである。

一方、ヴァーノン夫人は、フレデリカのそのような無邪気な愛情を、レディー・スーザンとレジナルドを引き離すための有効な切り札として使おうとする。実際レディー・スーザンとヴァーノン夫人の間では、フレデリカを巡って、彼女がロンドンの私塾から連れ戻されてきた時点から、すでに微妙な綱引きが始まっている。

…かわいそうに！あの娘の部屋の窓からの眺めは、教育上望ましいものとは言えません。あの部屋は、ご存じのように、片側に植え込みのある芝生を見下ろしています。そこからは母親とレジナルドが一時間も、熱心に話し込みながら散歩している姿が見えるのです。フレデリカの年齢の娘が、そのような光景を見てもなにも感じないというなら、それは幼すぎると言わざるを得ないでしょう。そんなお手本を娘に見せるなんて許されることじゃありませんわ。(233)

母親と娘のレジナルドを挟んだ緊張関係の描写は、後に『分別と多感』に登場するエリナとルーシーの伶俐な対立の場面へと発展していくように思われるが、『レディー・スーザン』における母娘の微妙な対立関係の描写は、オースティンの技の牙えを感じさせる場面でもある。サー・ジェームズの件でレジナルドに介入を要請したことで、フレデリカはサー・ジェームズとの結婚からは一応解放されるが、そのことがレジナルドをさらにレディー・スーザンに結び付けてしまい、フレデリカは母親への恐れと嫉妬で、息を詰めて二人を観察している。フレデリカは、慎ましく物静かで、レディー・スーザンとは対極をなす人物として造型されているが、フレデリカの中にも母親に劣らず悪意と嫉妬が潜んでいることを描き出すことで、オースティンはこの作品に、より陰影を付け加えていると言えよう。

この作品で興味深いのは、レディー・スーザンもヴァーノン夫人及びその母親のレディー・ド・カーシも、善意であれ悪意であれ、結婚をある種、影響力を行使してまとめ上げられるものと考えていることである。レディー・スーザンは結婚に関して、子の完全なる従順を要求するが、レディー・ド・カーシも自分たちの思い通りに、レジナルドをフレデリカとの結婚に誘導できるものと考えている。レディー・スーザンの実体が暴かれ、レジナルドとレディー・スーザンとの亀裂が決定的になったとき、レディー・ド・カーシは、嬉しそうに若い二人の結婚を予測する。「フレデリカのことを、頭から離れません。レジナルドがいつもの快活さを取り戻したら（近いうちに、そうなるものと思いますが）、私達はもう一度レジナルドから、彼の心を盗みだしてやりましょうよ。遠からず、あの二人の手が結び合わされる姿を見られるものと、私は大いに期待しているのです。」(268)そして結局はレジナルドは、「説得され、おだて

られ、フレデリカに愛情を抱くように、まんまと策略にのせられたのでした」(272)とあるように、カーシー族に本人はそれと意識させられずに、完全に操られたことになる。

『レディー・スーザン』は、ある意味で大変暴力的な作品である。主人公のレディー・スーザンを憑き動かしているのは、他の人間を思うがままに抑圧し、支配する権力への渴望である。彼女の世界では、支配か屈従、このいずれしか存在し得ない。計画が次々と挫じかれていくことに苛立ち、レディー・スーザンは次のように書き送る。

…自分の意志を、他人の気紛れに合わせて抑え付けることにはうんざりです。なんの義務を負っているわけでもなく、尊敬もしていないような人間に譲歩して、自分自身の判断を放棄してしまうことには、うんざりです。私は余りに多くのものを諦めてきました。余りにも簡単に他人に左右されてきたのです。(267)

これはレディー・スーザンの言い訳としては、なんとも奇妙な理屈である。しかしこの鬱屈した気分こそが、この作品を解く鍵のように思われる。レディー・スーザンは、息苦しいまでに女性の行動が制限された家父長制社会の中で、家父長のパロディを演じて見せる。しかもその行動は表面上はあくまでも、そのような社会で容認される優雅な礼儀作法に則っている。この作品は、一面では、見せかけと実体の落差という、18世紀小説のテーマの一つを扱っているとも言えるが、それと同時に抑圧と屈従についての興味深い研究の書とも言えるのである。そしてそれはまた、その社会に閉じ込められている、自由な精神の息苦しいまでのあがきとも解釈されるのである。P. J. M. スコットは、「『レディー・スーザン』は、オースティンの時代における、(中産階級の)女性のエネルギーのはけ口が極度に制限されているという困難な状況を、彼女の他のどの作品よりも、中心に据えて描き出している」と述べている。<sup>(10)</sup>レディー・スーザンは、次々と策略を立てては実行に移し、静止を恐れるかのように、「最も成功を収めそうな戦闘場所」を求めて移動していく。地方の屋敷からほとんど動くことのないヴァーノン夫人が、家庭的な楽しみ、即ち安全な静止の世界を象徴しているとすれば、レディー・スーザンは、そのような静止状態を忌避し、自らの能力を証明することに生き甲斐を求める、不安定な流動する世界を象徴している。破壊的で危険なエネルギーを内に抱え込みながら、何が起ころうと、「私はうろたえてなどおりません…大丈夫です、きっと私はうまい具合に私自身の話をでっち上げることができるでしょう」(262)と、自らの窮地にも動じない、冷静なレディー・スーザンの強靱な精神力が、この作品の大きな魅力にもなっているのである。

レディー・スーザンがジョンソン夫人にあてた手紙と、ヴァーノン夫人が母親にあてた手紙が中心となって展開されるこの作品は、突然第三の語り手が登場することで打ち切られることになる。レディー・スーザンもヴァーノン夫人もそれぞれ、手紙の中でお互いに対する主観的で偏見に満ちた意見を書き連ねる。そしてそれぞれの手紙がほぼ交互に登場するため、ふたつの価値観が並行してどこまでもぶつかりあっていくことになる。中立的な視点に立つ人物を登場させない場合、書簡体形式は倫理的な無秩序状態 (“moral anarchy”)を生み出すことになる。<sup>(11)</sup>従ってオースティンは、最後に「私」なる語り手を登場させ、それぞれの登場人物の結末を語らせる。フレデリカとレジナルドはド・カーシー家の思惑通り結婚し、レディー・スーザンは「ほんのわずかでも、情けない愚かさの程度が少なければ、確かに結婚してもいいと思いますわ、でもその点に関しては私自身、かなりロマンチックなところがあり、財産があるだ

けでは私をその気にさせられないということを認めなければなりませんわ」(208)と言っていた、正にその相手、唯一残った手持ちの札であるサー・ジェームズと結婚する。しかしオースティンの語りの口調は、あくまでも一步引いた、判断保留の状態を示している。

レディー・スーザンが二度目の結婚において、幸せだったか、あるいはそうでなかったか、私にはどのようにして、それを確かめたらいいのか分かりません。と申しますのも、その質問の答えがどちらであれ、彼女がいくら請け合ってくれても、その言い分を信じる人などいるのでしょうか。世間は多分そうであろうと思われるところから、判断しなければならぬのです。(272)

いささか皮肉を込めた判断保留である。ところが、その後すぐに次のような言葉が続く。「彼女に逆らうものは、何もありませんでした。夫と彼女の良心を別にすれば。」しかし、これこそがレディー・スーザンの姿そのものではないだろうか。つまり、彼女はやはり無傷のままなのである。かくしてレディー・スーザンは再び倫理的秩序の埒外へと飛び出して行くのである。その強烈なエゴイズムと生命力ゆえに、レディー・スーザンは倫理的判断を越えた、一種の真空状態の中に存在することになるのである。

注

- (1) Austen, Jane. *Lady Susan in Northanger Abbey, Lady Susan, The Watsons, and Sanditon*, Oxford University Press, 1980, p.211.本書からの引用は以後、本文中にページ数のみを記す。
- (2) Southam, B.C. "Note to *Lady Susan*" in *The Works of Jane Austen, Vol. VI, Minor Works*, Oxford University Press, 1967, p.243
- (3) Halperin, John. *The Life of Jane Austen*, Sussex: The Harvester Press Ltd., rpt., 1986, p.47
- (4) Austen-Leigh, William & Austen-Leigh, Richard Arthur. *Jane Austen: A Family Record*, ed. Le Faye, Deirdre, London: The British Library, 1989, p.83
- (5) Honan, Park. *Jane Austen, Her Life*, London: George Weidenfeld & Nicolson Ltd. 1987, p.101
- (6) Nokes, David. *Jane Austen, A Life*, London: Fourth Estate Ltd., 1998, p.152  
レディー・スーザンの娘に対する容赦のない虐待というプロットに関しては、オースティンの友人のロイド姉妹から聞かされていた、彼女達の冷酷な祖母にまつわる実話からヒントを得たものだとも言われている。  
cf. Drabble, Margaret. "Introduction to *Lady Susan*" in *Lady Susan, The Watsons, Sanditon*, Penguin Books, 1974, p.12
- (7) Nokes, p.152
- (8) Levine, Jay Arnold. "*Lady Susan: Jane Austen's Character of the Merry Widow*" in *Jane Austen, Critical Assessments, Vol. III*, ed. Littlewood, Ian, East Sussex: Helm Information Ltd., p.60
- (9) *Ibid.*
- (10) Scott, P.J.M. *Jane Austen: A Reassessment*, London: Vision Press Ltd., 1982, p.16
- (11) Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer*, Chicago: The University of Chicago Press, 1985, p.178